

## 「対格表現の地域差 —助詞ゼロをめぐる—」

国立国語研究所 木部 暢子

はじめに

日本語標準語は「主格-対格型」言語で、自動詞・他動詞の主格標識に「が」を、対格標識に「を」を使用する。しかし、話し言葉では助詞ゼロで格を表示することがある。

- (a) 太郎は 本を 読んでいるよ。
- (b) 太郎 本 読んでるよ。

日本語諸方言では、主格、対格の標示形式に地域差がある。この発表では、現在、作成中の「日本語諸方言コーパス（試作版）」を利用して対格表現の地域差、特に対格助詞ゼロ（無助詞形）に焦点をあて、助詞ゼロの出現状況が地域によって異なること、それに伴い助詞ゼロの機能が方言によって異なることを述べる。対格助詞の地域差は以下のとおりである。

### (c) 対格助詞の地域差

1. 弘前市方言では、主格、対格ともに助詞ゼロが基本である。
2. 広島市、鹿児島県頰娃町方言では、主格を「ガ」、対格を「オ」で標示するのが基本。
3. 対格助詞ゼロの出現の度合いを高い順に並べると、以下のようになる。

弘前 > 羽咋・大阪・北九州 > 東京 > 広島 > 鹿児島

### 1. 先行研究

- 1.1 対格が助詞ゼロで表示される要因として、次のようなものがあげられている。
  - ・有生性（皆島 1993, 竹内・松丸 2015）「きみを見たら」「おみこしのかつぎますか」
  - ・動詞との隣接性（松田 2000）「仏様 〇 拝んで」「それを人にしゃべって・・・」
  - ・定性（皆島 1993, 玉懸 2002）「先刻の女 〇 見なかったですか」「密輸には女を使うんだってよ」
  - ・代名詞（松田 2000）「なにに〇やるのかなあ」「旗 〇 振ってさ・・・」「あれを電車へこう落として」
  - ・情報性（Matsunaga 1988）

1.2 『方言文法全国地図』に対格助詞の地図がある。それを以下にあげる。

(d) 『方言文法全国地図』第6図「酒[を] (飲む)」



| <(SAKE)>  
f <(SYOOCYUU)>

(e) 『方言文法全国地図』第7図「おれ[を] (連れて行ってくれ)」



| <(ORE)>  
f <(WASI) waji, wasi  
J <(WAN)>

■ <koto>  
■ <goto> goto, yoto  
■ <godo>  
◆ <ḡodo>  
■ <goddo>  
↑ <gotoba>

## 2. 「日本語諸方言コーパス」について

2.1 「各地方言収集緊急調査」\* の音声データを使用し、検索ができるようにしたもの。平成25～27年度科研費基盤(B)により、青森県弘前市、東京都台東区、石川県羽咋郡押水町、大阪市、広島市、北九州市、鹿児島県穎娃町の6地点のデータを整備。

\* 1977～1985年に文化庁が行った方言談話の収録資料。全都道府県224地点、1地点につき30時間程度の談話録音テープ。データの一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』(国書刊行会)として方言音声、テキスト、共通語訳が刊行されている。国語研のホームページでも一部、公開している。



2.2 検索方法は、共通語訳から方言テキストを検索する方式をとっている。この方式の利点は、現代日本語の形態素辞書と検索ツールを利用することができる点、諸方言の横断検索ができる点である。将来的には、方言検索システムを整備する必要がある。

(f) 検索例 (助詞「を」)

地点	ID	話者	方言	共通語訳
弘前	53-000	B	ウン ソエ カダナ ノムス ホレ。	うん それ [は] 刀 [を] 飲むしほら。
東京	75-002	A	シキーオ フンジャー イケナイヨ。	「敷居を踏んではいけないよ。」
羽咋	3-000	B	ネ オジギア ソノ ワラオネーエ	ね おじいさんは その 藁をね
大阪	144-000	D	エー ベベ キテンナー。	いい ベベ [を] 着ているなあ。
広島	2-000	C	アノー ソノ カグラ マウネ。	あの その 神楽 [を] 舞うね。
北九州	27-003	B	チュー コトバオ ツカイヨッタ。	という ことばを 使っていた。
鹿児島	257-000	C	ガッチュー ハナス キケバ モー ナンダチャイガ	よく 話を 聞けば もう 涙だが

### 2.3 使用上の注意点

- ・ 話題、話者の数、話者同士の関係等がコントロールされていない。例えば、各地点の話者数は、弘前市3人(男2, 女1)、東京2人(男1, 女1)、羽咋3人(男2, 女1)、大阪市6人(男4, 女1)、広島市3人(男1, 女2)、北九州市4人(男2, 女2)、鹿児島市3人(男2, 女1)とまちまちである。また、話者同士の関係が地点ごとに異なるため、発話のスタイルも地点ごとにまちまちである。
- ・ 共通語で検索を行うので、方言と共通語訳との対応関係が重要なポイントとなる。方言と共通語の対応関係が難しい以下のようなケースが多々ある。

弘前 79-002 B ハナペサ ソレ ゼンマイコダケンタノ マガサテ  
鼻先に ほら ゼンマイみたいなのが 巻きついて

羽咋 69-017 B アー タノシミナ テ ユーテ  
ああ 気持ちがよい と言って

北九州 351-000 A ソレカラ モー セワイガルヨッタ。  
それから もう 忙しがっていた。



④039-001 A ハダハダテバ アノ ブリコ ガツツラガツツラガツツラテ  
 鱒というと あの ブリコ [を] がつつらがつつらがつつらと  
 O  
カンダモンダデバナッ。  
 かんだものではないか。  
 V

#### 4.2 助詞「ゴト」の条件

(h) 助詞ゼロと「ゴト」の比較 (出現回数)

地点	文構造	助詞ゼロ (総数 102)	「ゴト」 (総数 6)
弘前	対格 NP+V	91	2
弘前	対格 NP+格要素+V	1	<u>3</u>
弘前	指示詞+V	0	<u>4</u>

- ・ 動詞との隣接性：助詞ゼロには隣接性、定性（非定性）が関与している。
- ・ 定性：指示詞（ソレ、ソエ、アレ）はゴトが受ける。

⑤067-003 A ソエゴト オラ n ド コステ ナメルンダー  
 それ(飴)を 私たち [は] こうして なめるんだ。  
 O S V

⑥001-001 B ソエゴト キレコデ コー クルンデー  
 それを 布切れで こう くるんで  
 O V

⑦019-005 C ソレゴト フセク° クスリダラスワ  
 それを 防ぐ 薬らしいですね  
 O V

⑧048-001 A アレー アノ キ キレゴト マナグサ サステ  
 あれは あの × 錐を 目に 刺して  
 O V

- ・ 有生性：主格が有生名詞，対格が動物，無生名詞 の例がほとんど。弘前市方言のゴトは（有生名詞）・無生名詞の取り立てに使われる。

cf. 茨城県水海道方言の「ゴド」は有生対格マーカー（佐々木 1998），秋田方言の「ドゴ」は有生の対象物の取り立て（日高 2000），仙台市方言の「ドゴ」は有生かつ特定の目的語に対して用いられる（玉懸 2002）という。

⑨019-001 C ジャンコ° ノ フト ホレ X1 セアゴト グルグルハット テ スタノー。  
 田舎の 人 [が] ほら X1× を ぐるぐるハット と 言ったの  
 S O V

⑩102-000 C オエノ オヤ カチャタビゴト ハガヘダ  
 私の 親 [は] 裏返しの足袋を はかせた  
 S O V

18	007	A	アノトギ ホントニ サガンデアッタ ギ <sub>n</sub> ジュグワ。	あの時 本当に 盛んだった 義塾は。
19	000	C	サガンデアッタ。	盛んだった。
19	001	C	ソノトギデハネ ジャンコ° ノ フト ホレ X1セア <u>ゴト</u> グルグルハット テ スタノー。	その時ですよ 田舎の人 [が] ほら X1× を ぐるぐるハット と 言った の [は] 。

100	003	B	ソラ アス ツプテァカ° ルヤト ゴロカ° アノ ツマカワ ツダンズ ハグンダバ マエネワゲ。	それは 足 [を] 冷たがる × ところ が あの 爪皮 [が] ついたの [を] はくなら だめなわけだ。
100	004	B	ドーステ オメァ ベンジャズ モノ ア ツマカワデ スベル モンデ ネ ンダモノ。	どうして あなた ベンジャという もの は 爪皮で すべる もので ないんだも の。
101	000	A	ゲーダダモノ。	下駄だもの。
101	001	A	サンカグダ ゲダサ カネ ツデ ヌ ルンダベァ。	三角な 下駄に 金属 [を] つけて 乗 るんだろう。
102	000	C	オラダケァ シンパレ アシサ キエ ル オエノ オヤ カチャタビ <u>ゴト</u> ハガヘダ。	私は しもやけ [が] 足に 切れる [= 足がしもやけになる] からね 私の 親 [は] 裏返しの足袋を はかせた。

## 5. 北九州市方言の対格標示

5.1 基本型：主格は「が」で標示される。対格は助詞ゼロまたは「オ」で標示される。語順は S-O-V。

(i) 動詞との距離, 指示詞, 疑問詞

(出現回数)

地点	文構造	助詞ゼロ (総数 21)	「オ」 (総数 13)
北九州	対格 NP+V	21	11
北九州	対格 NP+格要素+V	0	0
北九州	指示詞	2	1
北九州	疑問詞	2	0

①049-000 C ワタシドモワ ゾーリ ハイチ イキヨッタヨー。

私たちは 草履 [を] 履いて 行っていたよ。

②058-001 C アノー X6 チャント フタリデ ゾーリオ ハイテ

あの X6 ちゃんと 二人で 草履を 履いて

③326-009 A ソレオ モー アレナ モローチ ショッタガナー。

それを もう あれね もらって していたけどね。

④349-002-1 A イネノ アレ スル トキジャケー チュチ

稲の あれ [を] する 時だから といって

⑤053-000-1 C アンタチャー モー ナン ハキヨッタカナ。

あなたたちは もう なに [を] 履いていたかね。

## 5.2 助詞ゼロの条件

- ・ 動詞との隣接性：助詞がゼロの場合も「オ」の場合も対格名詞句は動詞に隣接する。
- ・ 定性：対格名詞句が修飾要素を含むときは助詞「オ」が現れやすく，修飾要素を含まない時はゼロが現れやすい（ただし，⑱⑲のような例もある）。

### (j) 対格名詞句の構造

(出現回数)

地点	対格名詞句の構造	助詞ゼロ (総数 21)	「オ」 (総数 13)
北九州	NP[ <u>  </u> +N]	18	6
北九州	NP[修飾要素+N]	3	7

⑱058-001 C X7ノ アノ ババサンガ キレイナ ゾーリオ ツクリヨッタヨネ。

X7の あの おばあさんが きれいな 草履を 作っていたよね。

⑳326-003 A カキノハズシチューチナー。 スシオ ニギッチ

柿の葉鮓というね 寿司鮓を 握って

㉑307-000 B イマ アンタ オーキナ カオ シテ ミンナ モライヨルケ。

今 あなた 大きな 顔 [を] して みんな もらっているから。

㉒033-000 B アラマンノ コトバ ツカイヨッタ ソラー モー

粗雑な ことば [を] 使っていた それは もう

## 6. 鹿児島県穎娃町方言の対格標示

### 6.1 基本型：主格は「が」で、対格は「オ」（融合形）で標示される。

(20) 257-000 C ガッチュー ハナス キケバ モー ナンダチャイガ  
よく 話を 聞けば もう 涙だが

(21) 47-000 A ナンカイモ ショーシューオ ウケダ。  
何回も 召集を 受けた。

(22) 191-000 C バケツノ アイヂェ ミズオ ズット トイチンデ  
バケツの あれで 水を ずっと とりついで

### 6.2 助詞ゼロの条件

(23) 138-000 C マン ナッダゲ チュッセー アイ セダバッ  
まあ なるだけ と言って あれ [を] したけど

(24) 157-000 B X24ダ ワガエデー アイ シヨッタバッ  
X24たちは 自宅で あれ [を] していたが

(25) 442-000 B X47カ° オイ チカマユンナ チュバッ チカマエッソラ  
X47が 私 [を] 捕まえるな と言うけれど 捕まえてね

(26) 71-000 A ガッチュイ X16サン ミーコ° チャイカ° チュ ユダチュ。  
まるで X16さん [を] 見るようだ と 言ったそうだ。

(27) 331-000 C X38サンチュワ イマ ミセ ヤツドカ° ナー。  
X38さんという人は 今 店 [を] やっているかね。

- ・ 定性：指示詞（アレ），人称代名詞に助詞ゼロが現れる。??

付記

この研究は、平成 23～25 年度科研費基盤(B)一般 25284087 を受けて行った。

引用文献

- 阿部貴人(2009)「対話における無助詞化の地域差—東京・大阪・津軽方言の対照から」『月刊言語』38-4, pp. 40-46
- 小西いずみ(2015)「広島方言の対格表示—談話資料による軽量的把握—」『国語教育研究』56, pp. 13-24.
- 坂井美日(2013)「現代熊本市方言の主語表示」『阪大社会言語学研究ノート』11, pp. 66-83
- 佐々木冠(1998)「水海道方言の対格—有生対格と無生対格の統語論—」『日本語科学』4, pp. 99-120
- 竹内史郎・松丸真大(2015)「本州方言における他動詞文の主語と目的語を区別するストラテジー」国立国語研究所共同研究プロジェクト研究発表会「日本語のアスペクト・ヴォイス・格」(2015年8月21-23日)発表資料
- 玉懸元(2002)「仙台市方言における格助詞相当『ドゴ』の用法」『国語学会 2002 年度秋季大会 予稿集』pp. 127-132.
- 日高水穂(2000)「秋田方言の文法」秋田県教育委員会編『秋田のことば』無明舎出版.
- 松田謙次郎(2000)「東京方言格助詞『を』の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証」『国語学』51-1, pp. 61-76.
- 皆島博(1993)「日本語の格助詞「を」の省略について—有生性と定性の関与の可能性」『言語学論叢 松本克己克己教授退官記念論文集』pp. 58-70
- Matsunaga Kiyoko. 1988. Case Deletion and Discourse Context. *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, edited by W. J. Poser. Stanford: CSLI. pp. 145-154.